



まり、様々の生活の集中とすれば、小さな町は、ひとつのコミュニティと考えてよいような気がする。兄が以前住んでいたアムハーストバーグは、カナダ最南部にある人口六千人という小さな町なのだが、兄と街中を歩いていて驚いた。通りの向こうのアイスクリーム屋から声がかかり、スーパーマーケットでは、レジ係と兄が何ごとか話し始める。コーヒーションの戸が開いて女の子が二人飛び出して来たり、突然停車した車からは、「今晚家に来ないか」と声がかかる、といった具合に、街中が知り会いであふれている。わずか一年滞在した兄にしてこれだから、そこで生まれ、育った人々の間では、町の人全体が知り会いのようなもの、

といつて差しつかえないだろう。よくいわれる、個人主義という欧米人の生活に対する私たちの見方とは異なり、私はそこに大きな家族主義のような、結束した暖さを見た思いだった。

東京を見なれている私にとっては、カナダの街は総じてゆったりと、落ちついた感じが強い。そこに暮らす人々についても、そういった印象を受ける。陽気なアメリカ人とは、どこが違う。

ロブスターとブルーベリー

おいしいものに目がない私は、この面でもカナダが大好きになってしまった。

太平洋岸のスマック・サーモンは香ばしく、食べきれないほど。柔らかくジューシーなロブスタービーフは残すのが惜しまれるほどの味だったし、プリンス・エドワード島の丸ゆでしたロブスターは毎日食べていても飽きなかった。兄の友人の女の子が作ってくれたイタリア料理も初めての味だったが、何より忘れがたいのは、よく煮こんだ野菜スープ、自家製のピクルス、ひき肉のパイや鴨のメープルシロップ煮など、兄の友人のお母さんの手によるケベックの郷土料理だった。

オタワの朝市で買ったブルーベリーは、東京では絶対味わえない新鮮さだったし、道端の農家で買ったトマトの味も忘れられない。よくカナダやアメリカには、固有のおいしい料理がなく、ハンバーガーとワラジのような固いビーフステーキだけなどと言われるが、私にはそれはとて

も信じられない。あるいは空気のせいだろうか。私には日本でよく食べる、同じ名前の店のフライドチキンでさえおいしく感じられたのだから。

未来への挑戦

夏のカナダは、すべてにおいて素晴しかった。自然を利用したアウトドア・スポーツ、過ごしやすい気候。日没は遅く、娯楽施設は快適で、誰でもがその中にすんなりとけこめる。しかし、その夏は、厳しく長い冬と引きかえなのだ、と聞かされたとき、私は大きな衝撃を感じた。

ケベックのラヴァル大学の広大なキャンパスに建ついくつものビルが、冬には、完全暖房される地下道でつながれ、プール、体育館はもとより、陸上競技場、テニスコートすら屋根の下に収納されているという素晴らしい設備に、私は、北国としてのカナダの自然とそこに住む人たちが自然と自然と調和しようとしているかを考え、感慨を新たにした。人種も、文化も、住む地域も異なる人々が、広大で美しいけれども、ひとたび冬の嵐にでもなれば容易に人の命を呑み込む、零下数十度に達する自然の中にとけ込み、そこを切り拓き、そしてその中で培われてきた歴史こそが、カナダの生活そのものではなかったか。かつてアメリカを発展させたのは、フロンティアへの夢だった。北への挑戦の夢は、そのまま未来への挑戦の夢、新しいカナダを作りあげて行く動脈につながると思う。そして、その夢



を知っている人々、何よりの財産である自然と共に歩むことを知っている人々こそが、本当の意味で、カナダ人と呼べるのではないかと私は思う。だからこそカナダの自然は、そして文化は、私たちに新鮮な奥深い感動を与えてくれるのではないだろうか。

カナダの中ではおそらく最も人工的な都市トロントで私が感じた不思議な暖みと、おそらく最古の街並みであるケベック、大西洋岸の小さな漁村と荒けずりなカルガリー、優雅なオタワの町で私の感じた何かは、成長して行くカナダの息吹きだったと私は信じた。

(聖心女子大学一年)